

キナの苦い歴史 ※諸説あり

南米ペルーのアンデス高原では「キナの木は毒がある、神々の支配下にあるから近寄らないように、触らないように」と言われていた。ある日熱病にかかった少年が、道端の水たまりの水を飲んだ。その水は苦い味がした。その水溜りには、キナの木が倒れて浸かっていた。その水を飲むと熱が下がって元気を取り戻した。村に帰ってこの話を村人にした。それからペルーではキナ皮は解熱剤や胃腸の症状に使用されていた。



大航海時代において、感染症はあっという間に世界に広まっていった。またドイツで宗教改革が始まり、ヨーロッパではカトリック（旧派）とプロテスタント（新教）の対立があった。宗教改革に対抗するために、カトリックが世界各地に宣教師を派遣して布教活動をした。

南米からヨーロッパへのキナ皮の持ち込みには2つの説がある。呼び方なども諸説あり。

- 1：スペインのチンチョーナ伯爵夫人の夫がペルーで熱病にかかるが、キナの皮で治る。チンチョーナ伯爵夫人がヨーロッパに持ち帰り、キナが「チンチョーナ」と呼ばれる。
- 2：スペインのイエズス会が南米に布教活動した際に持って帰った。ペルーの副王の妻の名（マラリアがキナの皮で治る）がチンチョーナだった。

ヨーロッパの医学界は、自分たちの治療法（瀉血や下剤）があるため、しばらくキナの皮を認めなかった。そのためキナがマラリアの特効薬であるという事実は民間に広がらなかった。

しかしイエズス会が、「イエズス会の粉」として粉末状のキナの皮を配布した。ところが宗教改革の影響で、カトリックと対立するプロテスタントが「イエズス会が怪しい粉を広めようとしている、これは悪魔の粉であり、毒である」と噂を広めた。当時はイエズス会への逆風が激しく、この粉を使った信者は破門の対象になった。イエズス会の最高顧問がこの粉を広めようと頑張ったが失敗に終わる。プロテスタント支持者はイエズス会がどのようにし

て粉を使ってプロテスタントを根絶しようとしているかという陰惨な物語を作り上げ、大きなプラカードに書いて街を練り歩いた。フェイクニュース！

17世紀にマラリアがヨーロッパに流行った時に、タルボー（タルボット？）という医者が、キナの皮であることを伏せて、粉をマラリアの薬として使用し大儲けした。ところがイエズス会の粉を使っているのではないかと疑われたすと、タルボーは自分の名誉を守るために「私の使っている薬は、危険なイエズス会の粉ではない。」と明言してしまった。タルボーの名声と名誉は上昇し、ついにマラリアにかかったチャールズ2世に呼ばれることになり、粉で治してしまう。またフランスの王ルイ14世の息子がマラリアになり、それも粉で治してしまう。タルボーのフランスでの評判が一気に高まり、各地でも治療を行い、フランスでも大成功する。タルボーがイギリスに帰ろうとすると、ルイ14世は「粉の成分と処方を買取りたい」と申し出る。最初タルボーは断るが、ルイ14世は「もし処方を紙に書いてくれたなら、それを金庫に封印し、タルボーが死ぬまで金庫は開けずに秘密にする。」と約束する。タルボーは「それなら良いでしょう」と大金と恩給を受け取る。タルボーは名誉と粉の秘密を保ったまま死ぬ。

タルボーの死後、ついにヨーロッパ医学がキナの皮の価値を認めて、研究が進められていく。植民地政策が進み、外国への侵攻には熱病の特効薬であるキナの皮が必須だった。ヨーロッパの国々は、キナの木を取り合ったり、別の植民地へ植えようとした。しかし、ペルーの住民に反対されたり、輸入の途中で枯れたり、根付かせられなかったりした。また伐採しすぎて、キナの価格が高騰する（スペインではキナの皮と同じ量の金で取引した）。栽培園ではキナの皮が盗まれたり、模造品も多く出回った。キナの木の大規模伐採が進み、絶滅寸前にまでいく。ついにはインドやジャワで大規模栽培に成功した。また苦味がなく飲みやすいジントニックもマラリア予防として流行り、キナが大量に消費される。その間もキナの木は、皮を剥がされ、傷つけられ続けた。